

# 薬作り職人の 研究開発日記

-vol.1-

◎新連載

はじめまして。薬作り職人といいます。名前の通り、製薬会社で薬を作る仕事をしています。薬作りには、さまざまな役割分担があります。例えば、薬の種となる化合物を作る仕事(合成)、薬の種の中から、作用を持つ化合物を探し出す仕事(薬理評価)、体の中で薬の濃度がどのような挙動を示すかを調べる仕事(薬物動態)、薬の安全性を調べる仕事(安全性評価)、などが挙げられます。私は、この中でも薬理評価の仕事を十数年してきました。

私が薬学部に進学し、研究の道を選んだのは、薬学部のカリキュラムを見たのがきっかけです。薬学部では、物理化学、有機化学、生化学、生理学、薬理学、分析化学、製剤学、薬物動態学、などたくさんの科目を学べます。そこで、薬をツールにすれば、化学から生物までのいろんな知識が得られるのではないかと考えました。そして、いろんな分野を学習する中で、自分の一番知りたい分野を見つけ、その世界で自由に遊んでみたい、という思いが生まれました。これが、研究の世界を目指した理由です。

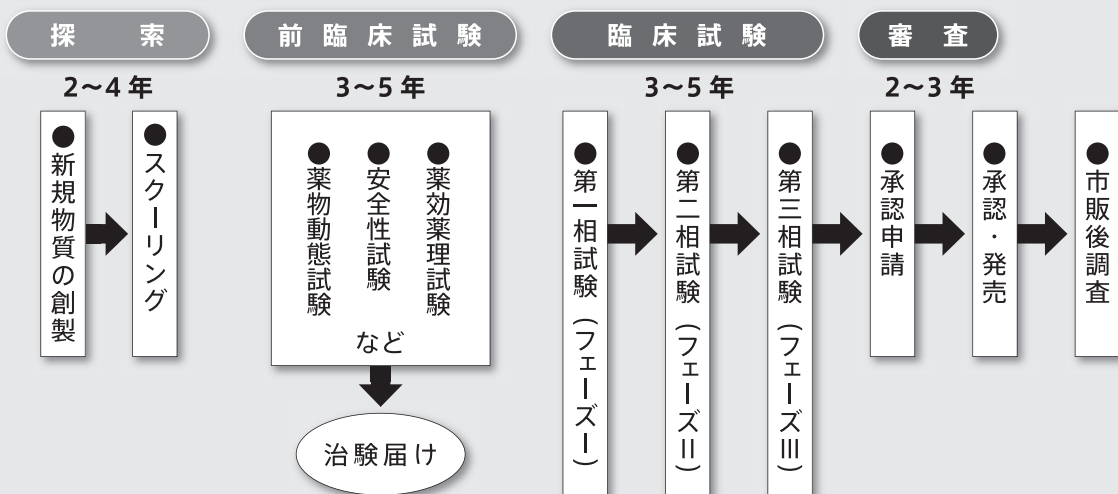
今の仕事の商売道具、薬理学の研究を志したのは、大学2年の時でした。当時好きだった科目は有機化学と生理学です。有機化学は「新しいものを創り出すための学問」、生理学は「新しいことを見つけ出すための学問」というところに魅かれていました。新しいものを創り出す科学、まだまだ未

知の領域が残っている科学。どっちも楽しそうじゃないですか。有機化学と生理学、できれば両方やりたいというのが正直な思いでした。そして、考えて出てきた答えは「薬理学はその両方を満たすことができるのでは?」というものでした。薬理学の方法論を使えば、薬の作用メカニズムを見つけ出すことができるし、しかも新薬を見つけ出す(創り出す)こともできます。一つの学問で一挙両得、これはいい、ということ、薬理学を志すことに決めました。大学4年のとき、運良くじゃんけんに勝って、希望通り薬理学の教室に配属が決まり、修士で卒業するまで、腰を据えて薬理学の研究をすることができました。そして、今の私があります。

会社に入って、十数年、私は、いまだ世の中で使われる新薬を作ることに成功したことはありません。経験的に、新薬が成功する確率は、約1万分の1。失敗するのが当たりまえの世界です。その世界の中で、悪戦苦闘しながらも、楽しんで仕事をしています。これは、やっぱり新しいもの作るワクワク感があるからかな、と思います。そして、私はバラ色の未来を考えるほど楽天的ではないですが、それでもいつも何かを創り出すことができるという希望は常に持っています。

これから研究者を目指す方にも、薬剤師を目指す方にも、この連載を通じて、薬作りのプロセス、そして薬作りのワクワク感を伝えられたらな、と思います。よろしくお願いします。

## 新薬開発の流れ



### Profile

#### ■薬作り職人

某製薬会社で、薬理評価を担当。この道十数年のベテラン(?)研究者。薬作り職人という筆名で、薬についてのwebサイトやブログを執筆中。趣味はブログ巡り、全国の観光地のミニ提灯集め、ロングドライブ&車中泊。